

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.199

April 2019

翻訳にも五分の魂

水野尚之

これまで私がたどってきた翻訳の履歴を、少しばかり紹介させていただこうと思う。私が翻訳の世界に足を踏み入れたのは、舟阪洋子氏、市川美香子氏とともに、ヘンリー・ジェームズの『自伝』を邦訳し始めた際である。『自伝』第1巻では、ジェームズ晩年のもっとも難解な文体（実は口述筆記）の翻訳に難渋しつつ、できるだけ原文の意を汲もうとした作業であったが、同時に、せっかく翻訳するのだから、原文の理解の助けとなる注釈、資料をできる限り盛り込もうとも努力した。結果、当時はまだ解明途上であったジェームズ家の系図も日本語で載せ、ジェームズが暗示するにとどまった一族の恥の歴史をも明らかに出来たと思う。（まだインターネットの利用が文学研究にはそれほど有用ではなかった時期だった。）第2・第3巻の翻訳に際しては、すでに普及しつつあったインターネットに大いに助けられた。一方、インターネットから得られる情報を超えるものを翻訳の付記として出さなければ、という思いもあった。作家ヘンリー・ジェームズの父が黒人の召使いを伴って訪れた父ウィリアムの出生地アイルランドのベイリバラの家は、今ではGoogle mapのStreet Viewで見ることができるが、その家の内部は見られない。アイルランドを研究対象としている筆者の妻がその家の前にいた時、その家を管理している不動産屋に偶然出会い、事情を話して内部の撮影を許された。『自伝』第2巻の翻訳の巻頭を飾ったのは、築数百年になる当時の内部の驚くべき姿である。一方私は、単独訳も手掛けつつあった。有名な『ロデリック・ハドソン』、『アメリカ人』、『デージー・ミラー』、『ある婦人の肖像』に埋もれてほとんど顧みられることのなかったジェームズの小説『信頼』には、訳す過程で、ジェームズ後期の作品の手法の萌芽がいくつか見つかった。同時に私は、この作品の背景が主人公の心の動きと密接に関わっていることも意識した。シエナのカンボ広場やマンジャの塔、バーデン・バーデンのクアハウス、フランスの保養地プーローニュ・シュル・メールなど、

初期のジェームズにとって土地の重要性は作品の構成と密接に結びついている。翻訳では自分で撮った写真を載せたかったが、不鮮明であったりして叶わなかった。

次の『マイケル・ジェームズの冒険』は幸運に恵まれた。結婚しなかったヘンリーに対し、兄ウィリアム・ジェームズの子孫の遺伝子は現在も脈々と伝わっている。ウィリアムの孫のマイケルが90歳近くで存命であることを知り、ボストン郊外に会いに行った。第二次大戦中に気象予報士として空母モンテレーに乗り、日本軍との戦いの模様をこっそり日記に書き綴った人である。もう70年も前の戦いを彼はよく覚えていたが、インタビュアー後、半年して逝去した。マイケル氏の日記の翻訳『マイケル・ジェームズの冒険』には、本人および一族の写真、カミカゼ特攻機が米艦に突入する写真など、生々しい記録を載せることができた。

『ガイ・ドンヴィル』の翻訳も多少の資料的価値があると思っている。アメリカ人ながらイギリスの大家作家たちに伍して創作していたジェームズは、自作が次第に不人気になっていくのを意識し、劇作に活路を見出そうとした。乾坤一擲とばかりに上演した劇『ガイ・ドンヴィル』の初演は、歴史に残る汚辱となった。不安のあまり近くで上演されていたオスカー・ワイルドの『理想の夫』を観ていて、自作の初演の様子を知ることなく上演後の舞台挨拶に登場したジェームズを待っていたものは、観客の嘲笑だった。当時ワイルド劇を上演し、現在も使われているヘイマーケット劇場と、あえなく閉館となった聖ジェームズ劇場の写真を読書に掲載できたのは、読む人に当時のジェームズの心の動きを実感する助けになったと信じている。

次はイーディス・ウォートンの中編『夏』の翻訳を予定している。レノックス郊外の当時の貧農の姿にどこまで迫れるか。写真もぜひ載せたい。

（京都大学）

2019年 アメリカ学会第53回年次大会 プログラム
(アメリカ学会HP上で参加登録をお願いします。)

1. 開催日 2019年6月1日(土)、6月2日(日)
2. 会場 法政大学市ヶ谷キャンパス
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
交通アクセス：<http://www.hosei.ac.jp/access/ichigaya.html>
会場校連絡先 中野勝郎 (電話：090-7195-3002 Email: nakanok@hosei.ac.jp)
3. 受付 大内山校舎1階
4. プログラム(要項・要旨集はホームページに掲載いたします。)

第1日 6月1日(土)

午前の部 自由論題 9:15~11:45

*タイトルの日英別は発表演語によるものです。英文プログラムはホームページをご覧ください。

*教室記号Yは大内山校舎、Gは富士見ゲート校舎です。

【Session A 人の移動をめぐる諸問題】 Y502

司会：米山裕(立命館大学)

討論：佐原彩子(大月短期大学)

大鳥由香子(ハーバード大学・院) 「マリウムとリウケ—20世紀初頭における移民法と子ども」

原 真由美(関東学院大学・講) 「宣教師と民主化—太平洋戦争と日米の動き」

小瀧 陽(関東学院大学) 「キューバ難民プログラムと1960年代アメリカの福祉改革」

【Session B 生の諸相 Aspects of Life】 Y503

司会：後藤千織(青山学院女子短期大学)

討論：二村太郎(同志社大学)

Yoka TOMITA 富田蓉佳(Columbia University GS コロンビア大学・院)

“With the Limited Time Left: End-of-Life Care for Terminal Patients in New York City, 1940-1970”

今井祥子(東京農業大学)

「アメリカ合衆国における日本食の受容とその真正性—レストラン Nobu の事例を中心に」

大賀瑛里子(ハワイ大学マノア校・院)

「『ロマンスの地』としてのハワイ—ハワイにおける日本のウェディング・ツーリズムとジェンダー化されたハワイの文化表象」

【Session C アメリカ経済と議会 US Economy and Congress】 Y504

Chair and Discussant: Kazuhiro MAESHIMA 前嶋和弘(Sophia University 上智大学)

Edward ASHBEE (Copenhagen Business School) “The Trump administration and the US - China Trade War”

李環誠(慶應義塾大学・院)

「アメリカ連邦議会において過去の公職経験が議員にもたらす効果—政党による州議会議員経験者の処遇を中心に」

山縣宏之(立教大学)

「ラストベルトの産業構造動態と製造業労働者—トランプ現象の経済的背景・8州の事例分析から」

【Session D Woman and Community】 Y505

Chair : Hiroko IWAMOTO 岩本裕子 (Urawa University 浦和大学)

Discussant : Miyuki DAIMARUYA 臺丸谷美幸 (National Fisheries University 水産大学校)

Nanette Rasband HILTON (University of Nevada, Las Vegas)

“Margaret Fuller and Ida B. Wells: Wielding the Female Gaze”

Malia McANDREW (John Carroll University)

“Recruit the Women: The Life and Career Lt. Ethel B. Weed in Post-WWII Japan”

Shawn HIGGINS (Temple University Japan)

“Ragtag Musicians and Group Identity in Paul Beatty’s Slumberland”

【Session E Cultural Transformation】 Y602

Chair : Mariko WATANABE 渡邊真理子 (Nishikyushu University 西九州大学)

Discussant : Raphaël LAMBERT (Kansai University 関西大学)

Eli Park SORENSEN (The Chinese University of Hong Kong)

“Future Realism and the Exception: Carl Schmitt and Hollywood Sci-fi Movie”

Peter THOMPSON (Carleton University)

“After Work: Deindustrialization and Anxieties About the Future of Work in Three Contemporary Television Programs”

【Session F Reconsideration of Framework】 Y603

Chair : Yuko ITO 伊藤裕子 (Asia University 亜細亜大学)

Discussant : Hideaki KAMI 上英明 (Kanagawa University 神奈川大学)

Will BARCLAY (Carleton University)

“Once, I Was King”

Joe RENOARD (Johns Hopkins University)

“The Limits of Ethnic Influence: American Politics and Northern Ireland, 1968-1998”

昼食休憩 12:00~12:50

理事・評議員会 12:05~12:50 Y405

午後の部

清水博賞授賞式 13:00~13:10 薩埵ホール (外濠校舎6階)

第一部：シンポジウム 薩埵ホール (外濠校舎6階)

「人種」をめぐる論争を問い直す 13:15~15:45

司会：貴堂嘉之 (一橋大学)

討論：渡辺靖 (慶應義塾大学)

報告：

中村寛 (多摩美術大学) 「ニューヨーク・ハーレムのストリートにおける「人種」概念」

石山徳子 (明治大学) 「アメリカ先住民族と人種—エリザベス・ウォーレンのDNA論争を事例に」

有光道生 (慶應義塾大学) 「21世紀アフリカ系アメリカ文学と「人種」の再定義—『今度は業火』(The Fire This Time)の兆候的読解」

渡辺将人 (北海道大学) 「人種と政治—オバマをめぐる政治的制約の再考」

第二部：JAAS-ASAK Panel 薩埵ホール（外濠校舎6階）

Roundtable “Teaching America in Transnational Contexts” 16:00~17:30

Chair：Mari YOSHIHARA 吉原真里（JAAS/University of Hawai'i ハワイ大学）

Panelists：Ki Yoon JANG（ASAK/Sogang University）

Haruo IGUCHI 井口治夫（JAAS/Kwansei Gakuin University 関西学院大学）

Junko ISONO KATO 加藤（磯野）順子（JAAS/Waseda University 早稲田大学）

懇親会 18:00~20:00

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1 法政大学市ヶ谷キャンパス

富士見ゲート館 3階 「カフェテリア つどひ」

TEL/FAX 03-6265-4761

<http://www.hosei.ac.jp/campuslife/support/tenpo/ichigaya.html>

（備考）運営：株式会社レバスト

第2日 6月2日（日）

午前の部 部会・Workshop 9:15~11:45

【WORKSHOP A Walled Worlds: Sovereignty, Nationalism and Globalization: JAAS-ASA-OAH Collaborative Workshop】G201

Chair：Yuko MATSUMOTO 松本悠子（JAAS/Chuo University 中央大学）

Discussant：Go OYAGI 大八木豪（JAAS/Kinjo Gakuin University 金城学院大学）

Speakers：

William NESSLY（ASA/West Chester University）

“Rethinking the Polycentric Transpacific in the Age of Trump's Walled America”

Elliott YOUNG（OAH/Lewis and Clark College）

“The Excludables: Indefinite Detention of Mariel Cuban Refugees and the Longest Prison Uprising in US History”

Renee ROMANO（OAH/Oberlin College）

“King Memorials and Confederate Monuments: The Battle over the American Landscape”

Yoshiya MAKITA 牧田義也（JAAS/Ritsumeikan University 立命館大学）

“Transcultural Entanglements in the Pacific World: War, Memory, and the Geopolitics of Humanitarianism”

【部会 A アメリカ南部を再考する】G401

司会：奥田暁代（慶應義塾大学）

討論：片桐康宏（九州産業大学）

報告：

荒木和華子（新潟県立大学）

「19世紀後半における南部黒人学校の転換の背景—白人至上主義、二つの黒人教育観、そして非政治的な闘いの功罪」
山中美潮（同志社大学）

「再建期と人種平等という理想—ルイジアナ州ニューオーリンズ市の過去と現在を巡るその意義」

諏訪部浩一（東京大学）

「消えゆく「南部」—フォークナーのスノーブス三部作を中心に」

【部会 B 20 世紀アメリカにおけるリベラリズムの形成と展開】 G402

司会：加藤一誠（慶應義塾大学）

討論：秋元英一（千葉大学名誉教授）

報告：

三島武之助（城西国際大学）

「革新主義からリベラリズムへ—セオドア・ローズヴェルトと『ニュー・リパブリック』」

佐藤千登勢（筑波大学）

「ニューディール・リベラリズム再考—フランクリン・D・ローズヴェルトに対する評価をめぐって」

坂出健（京都大学）

「ネオリベラル経済政策下での競争・独占・国家」

【部会 C 身体の境界とアメリカ文化】 G403

司会：北脇実千代（日本大学）

討論：川島浩平（早稲田大学）

報告：

小森真樹（東京外国語大学）

「変えられる遺体—フィラデルフィアのミュージアムと「芸術」の蒐集・研究・展示」

丸山雄生（東海大学）

「剥製術から考える 20 世紀のアメリカ文化—身体・死・保存」

井谷聡子（関西大学）

「スポーツにおけるジェンダー規制とレイシズム」

昼食休憩 11:45~13:15

分科会 12:00~13:15（内容については下記分科会のご案内をご参照ください。）

総会 13:15~13:45 G501

午後の部 部会・Workshop 14:00~16:30

【WORKSHOP B Walled Worlds: Sovereignty, Nationalism and Globalization: JAAS-ASA-ASAK Collaborative Workshop】 G401

Chair：Hideyuki YAMAMOTO 山本秀行（JAAS/Kobe University 神戸大学）

Discussant：Yukari KATO 加藤有佳織（JAAS/Keio University 慶應義塾大学）

Speakers：

Jolie SHEFFER（ASA/Bowling Green State University）

“Modeling Precarity, Solidarity, and Radical Uncertainty: Karen Tei Yamashita’s *Letters to Memory*”

Jungman PARK（ASAK/Hankuk University of Foreign Studies）

“Ideological Witch Hunt and Racial/Artistic Censorship in the 1950s: Case of Paul Robeson, African American Artist”

Rie MAKINO 牧野理英（JAAS/Nihon University 日本大学）

“Routes to Internment: Disrupting Postcolonial Politics in Karen Tei Yamashita’s Works”

【部会 D メディアの変革, 文化の変容】 G402

司会：生井英考（立教大学）

討論：門林岳史（関西大学）

報告：

高村峰生（関西学院大学）

「触覚的直接性と視覚的シンメトリー —ジェイムズ・エイジャーとウォーカー・エヴァンスの『今こそ有名な人々をたたえよ』における「忘れられた人々」の表象と倫理」

大勝裕史（東京経営短期大学）

「戦争の見せ方—メディアとしてのヴェトナム戦争映画」

横山佐紀（中央大学）「歴史と記憶の装置としてのミュージアム」

【部会 E Contingent Citizenship: Has the Korematsu Decision Been Overturned ?】 G403

Chair : Yoko MURAKAWA 村川庸子（Keiai University 敬愛大学）

Speaker :

Lorraine BANNAI（Seattle University）

“Repudiated in Words, but Not in Deed: The Meaning and Dangerous Continuing Relevance of Korematsu v. United States”

Discussants :

Akihiro YAMAKURA 山倉明宏（Tenri University 天理大学）

“Selective Remembering of the Past and (Almost Willful) Misreading of History”

Masumi IZUMI 和泉真澄（Doshisha University 同志社大学）

“Remembering is Not Enough: Continuing Misconstruction of Japanese American Exclusion Cases as Legal Precedents”

Yoko MURAKAWA 村川庸子

“Serving Justice?: Pre-War Planning to Deny the Rights of Japanese-American Citizens”

5. 注意事項

- 1) 大会参加登録は、学会ホームページの大会参加登録ページ上で5月10日までをお願い致します。
- 2) 懇親会の参加には事前の申し込みが必要です。大会参加登録ページでお申し込みのうえ、懇親会費は大会当日受付にてご納入ください。
- 3) 年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。
- 4) 会場までの交通アクセスについては、学会ホームページをご覧ください。宿泊や交通手段の確保は各自でお願いいたします。
- 5) 非会員の大会参加費は1,000円です。大会受付にてお支払いください。
- 6) 理事・評議員会について、弁当の注文は受け付けませんので、ご了承ください。

6. 会場案内

受付	大内山校舎1階
書店等出店	大内山校舎1階
会員用控室	Y404
本部スタッフ・役員控室	Y402
外国人ゲスト控室	Y403

6月1日（土）

午前 自由論題	Y502, Y503, Y504, Y505, Y602, Y603
昼食時 理事会・評議員会	Y405

午後 授賞式, 会長講演シンポジウム, ラウンドテーブル 薩埵ホール (外濠校舎 6 階)
懇親会 富士見ゲート校舎 3 階「つどひ」

6 月 2 日 (日)

午前 部会およびワークショップ G201, G401, G402, G403
昼食時 分科会 Y405, Y501, Y502, Y503, Y504, Y505, Y602, Y603, Y604, Y605
午後 総会 G501
部会およびワークショップ G401, G402, G403

* Y = 大内山校舎, G = 富士見ゲート校舎

第 53 回年次大会 分科会のご案内 6 月 2 日 (日) 12:00~13:15

1. 「アメリカ政治」 責任者: 菅原和行 (福岡大学) ksugawara@fukuoka-u.ac.jp

テーマ: 「アメリカにおけるメディアの分極化とフェイクニュース問題」

報告者: 清原聖子 (明治大学)

世界的に「フェイクニュース」という言葉が広まったきっかけは、2016 年アメリカ大統領選挙であった。2016 年アメリカ大統領選挙関連のフェイクニュースでは、「ローマ法王が共和党のトランプ候補を支持」や、銃撃事件にまで発展したいわゆるピザゲート陰謀論などがよく知られている。本発表では、フェイクニュースの定義の説明から始め、なぜアメリカでフェイクニュース問題が顕在化したのか、その要因を探る上で、日本との比較の視座から、アメリカにおけるメディアの分極化やメディアに対する信頼度の低下、といったメディア環境の特徴について考察する。さらに、フェイクニュースの拡散がとりわけ選挙や政治に与える影響が懸念されるため、どのような対策が検討されているのか、その要点を紹介する。

2. 「アメリカ国際関係史研究」 責任者: 水本義彦 (獨協大学) mizumotoy@hotmail.com

テーマ: 「米ソ核軍備管理交渉史の再検討」

報告者: 竹本周平 (国際教養大学)

2018 年 10 月、米トランプ政権は 1987 年の INF (中距離核戦力) 全廃条約からの離脱を表明した。また 2021 年 2 月には、2011 年に発効した新 START (戦略兵器削減) 条約の期限を迎える。だが、「新冷戦」と評されるまで米露関係が悪化している点から、後継条約の実現どころか、同条約の延長さえも危ぶまれている。1972 年の ABM (弾道弾迎撃ミサイル) 制限条約が既に 2002 年 6 月に破棄されている事実も合わせると、冷戦期から継承された核の軍備管理体制は岐路に立っているとも言えよう。このような状況を鑑みると、今現在、核軍備管理の意義が再評価されていることは当然のようにも思える。本報告では、現在の米露核軍備管理体制の起源である冷戦期の米ソ核軍備管理交渉まで遡り、その意義と問題点を再検討することを目的とする。そして歴史的観点から現在の米露の核軍備管理交渉への示唆を試みる。

3. 「日米関係」 責任者: 末次俊之 (専修大学) suetoshi007@gmail.com

テーマ: 「日米安保体制と辺野古基地の新設」

報告者: 清水隆雄 (元・国立国会図書館専門調査員)

1996 年、沖縄の米軍基地負担軽減策を話し合う行動委員会 (SACO) は、米海兵隊の普天間基地が、代替施設建設を条件として、我が国に返還されると発表した。代替施設の候補地としては、沖縄県、日本本土、グアムなどが挙げられたが、結局、沖縄県の辺野古に建設されることになった。この報告では、米国人の中には沖縄以外でも容認する姿勢を示す者もあり、また、沖縄県が負担軽減を訴えているにもかかわらず、なぜ沖縄に建設されることになったのか、その理由について検討する。この報告では、冷戦終了後の国際情勢の変化と、それに伴う米国の東アジア戦略の変化、米軍再編等の変化が、日米安全保障条約の内容にも変化も促し、新ガイドラインの設定や関連国内法の制定に至ったこと、及び我が国の防衛体制も、北方重視から島嶼防衛へと変化したことを中心に、抑止力維持など辺野古に建設を決定

するに至った様々な要因を加えながら検討する。

4. 「経済・経済史」 責任者：名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp

テーマ：「アメリカ退職後所得保障システムの変化―生計と政策的争点への影響」

報告者：吉田健三（青山学院大学）

20世紀末よりアメリカの年金システムは大きく変化してきた。いわゆる伝統的な確定給付型年金から確定拠出型年金への移行である。この変化は、アメリカ国内でも世界の年金政策をめぐる議論においても注目を集め、日本でも2001年のいわゆる「日本版401K」導入の際にモデルとして盛んに紹介されていた。それは、経済のIT化、グローバル化に対するアメリカ型福祉国家システムのいち早い対応であるとともに、退職後所得、さらに生活そのものを不安定にするものとされ、アメリカ国内でも数々の政策的対応が検討されてきた。この報告では、1981年に401(k)プランが導入されて40年近くたつ今日において、この変化が実際にアメリカの現役労働者の退職資産形成、また高齢者世帯の所得状況にどのように影響を与えたのか、またそれが政策的論点の変化をもたらしたのか、という点について具体的に考察していきたい。

5. 「アジア系アメリカ研究」 責任者：野崎京子（京都産業大学）nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp

テーマ：「カズオ・イシグロとアメリカ」

報告者：莊中孝之（京都外国語短期大学）

カズオ・イシグロとアメリカ。この両者の間には浅からぬ縁がある。イシグロは長崎生まれの被爆二世であり、初期の作品では原爆の存在が背景に意識されていた。また彼は映画や音楽といったアメリカの大衆文化から強く影響を受けている。短編集『夜想曲集』ではそのことが如実に見て取れる。そして海洋学者である彼の父は、アメリカの軍事的な研究にも関わったことがある。その父へのイシグロ自身の複雑な思いは、作品の中にも微妙な影を落としているように思われる。さらに近過去のイギリスを舞台にしてクロウンを主人公に据えた『わたしを離さないで』や、中世の同国において展開される『忘れられた巨人』といった近年の作品は、アメリカの、あるいはアメリカと日本との関係の物語として読むことも可能である。この報告では、イシグロとアメリカとの関りを、伝記的な事実や作品の解釈を通じて探ってみたい。

6. 「アメリカ女性史・ジェンダー研究」 責任者：鈴木周太郎（鶴見大学）shutarosuzuki@me.com

テーマ：「【合評会】小檜山ルイ著『帝国の福音：ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』（東京大学出版会、2019年）」

報告者：小檜山ルイ（東京女子大学）、松原宏之（立教大学）、安武留美（甲南大学）

小檜山ルイ会員の著書『帝国の福音：ルーシー・ピーボディとアメリカの海外伝道』についての合評会をおこなう。近代プロテスタント・キリスト教の宣教活動と帝国主義の関係について、20世紀前半に海外伝道促進活動に尽力し東京女子大学をはじめとするアジアにおける7つのキリスト教女子大学の設立に関わったルーシー・ピーボディに焦点を当てて考察したこの本について、まずは小檜山会員より紹介していただく。その後、松原宏之会員と安武留美会員より書評コメントを発表し、小檜山会員による応答後、フロアと質疑応答およびディスカッションをおこなう。女性史、ジェンダー史、帝国主義、トランスナショナル・ヒストリー、教育史など、広範な関心を持つ会員による活発な議論を期待したい。

7. 「アメリカ先住民研究」 責任者：佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp

テーマ：「プエブロ・インディアンの土器製作：文化が育んだ多様性」

報告者：飯山千枝子（日本エッセイスト・クラブ）

1500年ほど前、プエブロ・インディアンの先祖にあたる人々が、現在のアメリカ合衆国南西部に定住して農耕と土器製作を始めた。現代のプエブロ・インディア人が製作する土器は、実用品から儀式用の伝統土器、みやげ品、工芸美術品、アート作品まで多様な広がりを見せている。その背景には、スペインによる250年余の植民地時代や1848年からのアメリカ合衆国による領有などの歴史がある。土器に見られる多様性は、人びとがプエブロ文化を基盤として各時代と柔軟に向き合い、臨機応変に生き抜いてきたことによって育まれたものである。さらに、サンタフェを中心とした

白人文化も受け入れてプエブロ土器は変化している。そうした変化から生まれる多様性こそが土器製作の活力であり、また、伝統の刷新や文化を再生していく原動力であることを紹介したい。

8. 「初期アメリカ」 責任者：石川敬史（帝京大学）t-ishikawa@main.teikyo-u.ac.jp

テーマ：「ポスト共和主義パラダイム期のアメリカ革命史研究—Gordon S. Wood vs. *William and Mary Quarterly*」

報告者：鰐淵秀一（共立女子大学）

今年度の本分科会では、今日のアメリカ革命史研究をめぐる現状認識の共有と世代間対話を目的としたオープンディスカッション形式のミーティングを試みる。議論への導入として、報告者が合衆国におけるアメリカ革命史研究の現状を「ポスト共和主義パラダイム期」と捉え、1990年代に共和主義論の影響力が減退し、21世紀に入り顕著となった大西洋史や大陸史、グローバル史の興隆の中で研究関心の多様化や新たなパラダイムの模索が進む状況について、私見に基づいて若干の整理を行う。その際、研究動向の網羅的レビューではなく、2010年代に入って顕在化した当該分野の指導的歴史家 Gordon S. Wood と指導的学術誌 *William and Mary Quarterly* の対立と論争を中心に紹介し、そこから浮かび上がるアメリカ革命史研究の現状と方向性を確認する。報告に続いて、今後のアメリカ革命史研究の展望について参加者を交えたディスカッションを行いたい。関心を共有する諸氏の積極的な参加を期待する。

9. 「文化・芸術史」 責任者：小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp

報告：山本桂（埼玉大学・講）「対米観光政策にみる戦前期の観光地日本」

進藤幸代（多摩美術大学）「スポーツ・ツーリズムにおけるホストとゲストの関係—runDisney を事例に」

今回の分科会では「ツーリズム」をテーマにして二人の研究者に報告を行ってもらおう。山本桂氏は戦前の対米観光政策を取り上げ、そこで提示された「観光地日本」について考察する。日本では1912年に官民合同でジャパン・ツーリスト・ビューローを創設し国外からの訪問客へサービスを開始したが、そこで製作されたガイドブックやポスターには日本の近代化や帝国主義を強調する一方で日本の古さや伝統をも押し出すという複雑な心理が表象されていた。また、進藤幸代氏は、アメリカのディズニーリゾートで開催されるマラソンイベント runDisney を事例に、既存の観光地がスポーツイベントを組み込むことで見えてくるホストとゲストの関係性について報告を行う。runDisney において、ゲストはゲストのまなごしの対象になる操作がされており、ホストの役割をホストによって与えられていることを明らかにする。「モノから記号へ、記号から文化的体験へ」と消費社会における主要な取引対象が移行するとともに「ツーリズム」が占める文化的領域も拡大しているなか、このテーマについて議論できることは非常に意義深いと思われる。

10. 「アメリカ社会と人種」 責任者：武井寛（岐阜聖徳学園大学）h.takei@gifu.shotoku.ac.jp

テーマ：未完のプロジェクト—アメリカ型多文化主義とは何（だったの）か？」

報告者：南川文里（立命館大学）

2010年代のアメリカ合衆国の人種エスニック関係を考えるうえで、多文化主義という思想・運動・政策の位置づけが問われている。2016年大統領選挙におけるトランプ現象は、多文化主義の限界や問題点を露呈させた出来事として、21世紀の欧米社会における「多文化主義の死」という潮流の典型例にも挙げられる。しかし、これらの議論の多くは、多文化主義の国際的な多様性を考慮せず、またアメリカ型多文化主義が有する独自の歴史的な文脈への理解も不十分のまま、「少数者優遇」「集団優位」という1990年代までの反多文化主義論を反復しているだけのようにも見える。本報告では、(1) 国際比較におけるアメリカ型多文化主義の独自性、(2) アメリカ型多文化主義が埋め込まれた歴史的な文脈の双方からアプローチすることで、あらためてアメリカにおける多文化主義とは何であったのかを考えたい。

栗原涼子 著

『アメリカのフェミニズム運動史

——女性参政権から平等憲法修正条項へ』

(彩流社, 2018年, 3,024円)

フェミニズム研究という言葉は、ここ20年ほどはジェンダー研究という言葉に包摂／代替されてきた。これはかつての女性学が十分に議論しきれなかった非主流派集団に属する女性のダブルバインドの構造論、女性学が対象としていなかった男性性論・クィア論・植民地主義論を組み込むことにより、生と性にかかわる権力性の問題の多角的検証が積極的に行われるようになったことと無縁ではない。それでは主流派集団についてはいかなる検討が行われてきたか。本書は、白人ミドルクラス女性による女性参政権運動、男女平等条項キャンペーン、フェミニズム運動について、近代市民権論と規律化論の最新の知見をふまえ、運動の理論と政治的葛藤を描いた意欲作である。

第1章から第4章は、x軸にアメリカの社会運動の多くを分断する連邦と州の管轄問題、y軸に人種問題を配置し、そのうえでz軸としてその時代の 이슈を置いていくスタイルをとる。(xyz軸の表現は紹介者のものであり、著者は使用していない。)具体的には、第一次世界大戦における戦争協力と女性の国民化の論理、社会主義と慎重に距離を置きながら女性の労働の問題を位置づけることの階級性、移民男性と結婚したアメリカ生まれ女性の国籍条件をめぐる議論と移民女性の等閑視、シェパード・タウンナー法をめぐる母性保護と社会福祉法制の理解が取り上げられている。これらを通してあぶり出されるのは、フェミニズム運動が、巷間言われるような「空中戦」ではなく、また参政権獲得後に迷走したり消滅したりしたわけでもなく、その時代の具体的な問題と格闘していく多様な運動ということである。それゆえ ERA に流れ込む論点は、専門職女性の労働権と家族の価値の重視という二項対立ではなく、より複層的な知と認識が投影されたものとなる。

第5章は、リベラル・フェミニズムの議論に女性の解放をもとめるラディカル・フェミニズムが提起したものを対置しつつ、両方を架橋する「シスターフッド」概念の創生を、多文化主義の興隆を背景にして描く。そこから白人中産階級女性フェミニスト自身がそれまでの運動の白人性と中産階級性を発見していくことの意味が提示される。

本書は「どうあるべきか」という問題設定をしていない。ゆえに多文化フェミニズム運動の展望は描かれない。しかし本書を通じて読者は、フェミニスト運動が取り組んでいた問題は何であったか、それに対して政治的にどのように対処しようとしたか、というアプローチ、すなわち「どうであったか」という問いが掘り起こす素材の豊かさを知り、多くの示唆を受けることだろう。

平体由美 (東洋英和女学院大学)

中西佳世子・林以知郎 編

『海洋国家アメリカの文学的想像力

——海軍言説とアンテベラムの作家たち』

(開文社出版, 2018年, 3,024円)

本書は、アンテベラムの文学研究において顧みられることが稀であった海軍というテーマと文学の関係性を考察する論集である。収められた11の論考は、「国民国家としての制度の確立を急ぐアメリカ社会が洋上に再定位された縮図」(中西)である海軍と、様々な海軍体験を持つ作家のイマジネーションとが影響を与え合う様を多角的に明らかにする。

第一部「海洋国家アメリカと海軍の言説空間」では、海軍創設と海軍内部での言説が変質する様が、他者との関わりを通して考察される。阿川論は、独立直後から現在まで続く海軍の必要性の議論に注目し、様々な対立項の間で揺れるアメリカの姿を指摘する。続く布施論は海軍大学校での教育制度を分析し、海軍言説の変容がトランスナショナルな軍事思想の広がり軌を一にしていた事を詳らかにする。佐藤論では、バーバリー諸邦との軋轢と力による制圧の選択という体験が「巨大な孤島・アメリカ」の始点であった事が論じられる。林論はソマーズ号反乱事件にまつわる言説を読み解き、メルヴィル、ホーソン以降の文学へ継承される言葉と意味の関係における恣意性を確認する。

第二部「海洋国家アメリカの文学的想像力」は、アンテベラムの文学作品と海軍言説の交錯する空間としての海が舞台となる。大野論はホーソンの航海記編集が『緋文字』にもたらした影響を分析し、海という空間の逸脱性を論じる。中西論では、ホーソンとペリー提督が共有した海軍士官の視点による海軍言説が、文学的想像力を現実問題打開の策とするものであった事を解き明かす。平水夫の視点に着目する真田論は、メルヴィルの『ホワイト・ジャケット』における海軍批判と民主主義への礼賛と懐疑に、民主主義の多義性への賛歌を読みとる。西谷論は、過去へのノスタルジアを手がかりに、疎外された語り手の言葉にひそむ創造の可能性を考察する。メルヴィルの「エンカウンターダズ」に異界的な群島の海図の矛盾と混沌を見て取る橋本論は、近代科学主義による支配に虐げられた者への哀惜と共感の念を掬いあげる。辻論は二つの軍艦物語『ホワイト・ジャケット』と『ビリー・バッド』を階級と人種の問題から比較し、晩年のメルヴィルに至る「深淵」の認識の変化を緻密に追う。最終章の貞廣論ではホイットマンの「おお船長」と「インドへの道」における保守性と意図的な忘却に、英国の帝国主義的海洋覇権に対するオルタナティブな可能性が見いだされる。

越境と雑多を内包する海洋風景を描き出す本書は、混沌から秩序へと向かう海洋国家アメリカの転換期のダイナミズムを読者に追体験させる。多様な価値が乱立し、既存の制度が崩壊しつつある今、「容易な表象化を拒む海の姿を手繰り寄せてくれる繫留索」(林)を我々の手に届かせる一冊である。

大武 佑 (茨城工業高等専門学校)

松本俊太 著

『アメリカ大統領は分極化した議会で何ができるか』

(ミネルヴァ書房, 2017年, 6,480円)

二大政党の分極化は、現代アメリカ政治研究における最重要テーマの一つであり、多くの研究者の関心を集めてきた。本書は分極化と大統領の立法活動との関係に焦点を当てた研究であり、独自の理論によって分極化のメカニズムやその中で大統領の影響力に関して、新たな見解を提示するものである。著者は、理論の妥当性を綿密な計量分析と事例研究によって実証的に確認しており、そこから得られた知見は大統領研究や議会研究はもとより、広くアメリカ政治研究や比較政治学の分野に貢献するものである。

本書によれば、ニュー・ディール以降、大統領は立法に積極的に関わり、超党派的に国をまとめる「行政の長」の役割を担ってきたが、分極化の進行に伴い、「政党の顔」の役割が期待されるようになった。その結果、大統領による立法活動は、たとえ純粋に政策の実現を望むものであったとしても、大統領野党には党派の行動とみなされ、超党派の多数派形成が困難になっているということである。一方、上記の理論には「他の条件が同じならば」という留保がつけられており、条件次第では大統領が立法活動を成功に導くことができる可能性も示唆している。分極化の時代においても大統領が明確な立場の表明を控え、大統領野党に政策面で譲歩したり、政治的な得点を与えるといった「レトリック」を用いることにより、超党派の多数派形成が可能になるということである。

本書では一連の考察を踏まえ、分極化の進行により、選挙に勝利した大統領が政策革新を起こすことが困難になっていることを指摘している。すなわち、選挙に勝利し、権力を獲得すること、自らの政策を実現することとの間にトレード・オフの関係が生じるようになったということである。本書によれば、このトレード・オフを解消できるかどうかは、大統領のスキルに負うところが大きく、「政策革新を目指しながらも議会と適度な距離を置く(247頁)」といった行動が必要となる。一方、大統領がうまく立ち回ることができなければ、大統領の関与によって争点は党派性を帯び、分極化に拍車をかける。このように本書では、大統領は分極化によって行動を制約されるばかりでなく、自らも分極化の原因となりうることを指摘しており、これを「大統領に起因する分極化」と表現している。

本書の理論は、トランプ政権発足後の状況とも整合性が取れ、立法において十分な成果をあげられていない状況を的確に説明しているように思われる。この状況を打開すべく、同政権では特別多数を回避する議事手続きや、大統領令のような議会を迂回する手段が用いられているが、分極化の進行により大統領がこうした行動を選択する可能性があることは、本書においても言及されている。分極化の時代において大統領には何ができるのかという点に関しては、今後も本書に続き、さまざまな研究が生まれるであろうし、そのたびに本書は参照され続けるはずである。

菅原和行 (福岡大学)

高野泰志 著

『下半身から読むアメリカ小説』

(松籟社, 2018年, 3,024円)

なぜ「下半身」なのか、どこが「下半身」なのか。本書にかくも挑戦的なタイトルを与えた理由を、著者はこう記している。「書名に『下半身』といういささか下品とも思われかねない語を用いたのは、『セクシャリティ』という穏当な語よりも、もう少し語ることをはばかれるタブーを意識させることばを用いたかったからである」。ところがほどなく現れるのは、「とはいいつつ本書でこの『下半身』という用語を用いている箇所はそれほど多くない」という断り書き。読者の知的好奇心は、いやがうえにも高められる。

いま米文学分野で最も旺盛な書き手の1人である著者によるこの本は、みずからの関心やそれに応じて集めた素材をいかに練りあげ、テーマ化し、研究(書)や博士論文にまとめればよいか、この課題に取り組む若手に参考にしてもらいたい。みずからの研究を成す素材から、どのように共通トポスを見つけ出すのか。概念化という飛翔の程度をいかに決め、その拠り所をいかに担保すればよいか。言葉や表象を意味に還元する時に、またキーワードを使う時に、いかに差異に敏感になれるか。この書物は、文学研究の方法論を模索しようとする人が、その出発点として参照すれば、大いに思考を掻き立てられる成果であるといえるだろう。

全3部、16章で扱われる作家は多彩である。ポー、ホーソン、メルヴィル、トウエイン、ジェームズ、ヘミングウェイ、フォークナー、フィッツジェラルド、ノリス、サリンジャー、カポーティなど、先行研究が非常に多い米国主要作家による作品の解釈が、果敢かつ独自に、そして確かな足取りで進行してゆく。とりわけ印象的なのは、「小説」というメディアに対する著者自身の問題意識の鋭敏さである。世俗的な生活における個人の自我への関心とともに、ひいては近代的な大衆社会や都市生活の拡張とともに発達したとされる小説。畢竟このジャンルには本質的に、プライベートへの飽くことのない興味内在し、それを探る作家にあっては、性という究極の謎、あるいは「タブー」への想像力が独自の形で働いている——本書の議論の基底については、こうまとめることができるだろう。そこにビューリタンの拘束や、作家個人々の美意識や女性観、倫理的葛藤や性道徳への立場などが入り組んで、下半身の文学世界が体系化されるというわけである。

著者がみずからの言語感と博学をもって読者に問う各章の議論は、自信に彩られたものである。そのトーンは、「人文書」の存在感が細るいっぽうである。昨今、頼もしくまた我々を元気づけてくれるものに違いない。ただ、私個人の感覚で読んだ際、やはり時折、下半身という合言葉のうちには収まりきれない指摘や議論、細部の片鱗があった気がした(無論「下品だから」ではない)。本書はそうした細部への対話を開く研究書でもある。議論を介し、解答よりは問いを与えるタイプの書物だ。またそれ以上に、多くの読者は本書によって、小説のスリルと読むことの意義を体感できるはずである。

新田啓子 (立教大学)

第54回年次大会企画・報告募集のお知らせ

アメリカ学会第54回年次大会は、2020年6月に北海道大学にて開催の予定です。大会での自由論題報告と部会企画提案を下記の通り募集します。会員のみならずからの積極的な応募をお待ちしております。すべての応募は年次大会企画委員会（program@jaas.gr.jp）宛に、1～3のうち該当する件名を明記し、それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11月20日）

報告テーマ、1,500字程度の要旨、およびキーワード5つを記載。

自由論題での報告は、海外在住の場合（下を参照）を除き、会員に限られます。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ、応募内容を暫定的に受理し、入会が認められた時点で正式に審査対象とします。

〈海外在住の非会員〉 海外在住の方（国籍を問わない）は、非会員のままで自由論題での発表が可能です。ただし、報告が決定した場合は、2020年3月1日までに大会参加費（12,000円・懇親会費を含む）の支払いが必要となります。大会参加費は返金不可となっておりますのでご了承ください。

報告者には2020年5月15日までにペーパー（和文の場合、8000字～12,000字、英文の場合、5,000～7,500 words程度）を提出していただき、学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し、年次大会の前後2週間のみペーパーを掲載します。なお、報告内容は未発表のものとし、応募者多数の場合は要旨に基づく選考を行うことがあります。また、英語での報告の場合は、要旨・タイトルは英語としてください。

なお、第54回から自由論題の発表者について、パネル形式の応募も認めます。詳細は年次大会企画委員会にお問い合わせください。

2. 「部会の企画提案」（締切日：9月6日）

部会のテーマおよび800字程度の要旨。報告者案があれば合わせてご提案ください。部会の企画に関しては、以下の申し合わせ事項にご留意ください。第52・53回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は、第54回大会の部会では報告できません。司会者、討論者としての応募も原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため、原則学会員としてください。非会員の部会登壇者に対して、学会から謝金・交通費などは支払われませんので、ご了承ください。また、登壇者の構成については、ジェンダーや地域の多様性に配慮して下さい。学際性のある企画を歓迎しますが、必ずしもそれを条件とはいたしません。若手会員の積極的な応募を歓迎いたします。

3. 「分科会開催申し込み」（締切日：8月31日）

新規の場合は、分科会趣旨（400字以内）と、連絡責任者および賛同者5名の氏名をお知らせ下さい。継続の場合にも、分科会責任者氏名を添えて、継続する旨をご連絡ください。

なお、全ての企画内容の最終決定は、年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを、あらかじめご理解ください。

年次大会企画委員会

アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。

1. 応募資格：

- ① アメリカ学会の会員であること。
- ② 国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③ 発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④ 大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

2. 審査基準：

- ① 大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ② American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historiansのいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。
- ③ 他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④ そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

3. 応募方法, 結果発表, 発表後の提出書類

- ① 次の書類を6月16日～30日までの期間に, 国際委員会 (international@jaas.gr.jp) 宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
 - (1) 履歴書
 - (2) 業績書
 - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書 (電子メール可)
 - (4) 発表のタイトルと要旨 (英語で250-300語程度とする)
 - (5) (ASA, ASAK, OAH 以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報 (目的, 歴史, 規模等, 字数は指定しないが, 簡潔で正確であること)
 - (6) 理由書 (奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので, 申請時にほかの組織による援助を申請中か, あるいは援助を受けることが決定した者は, その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには, 所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお, 旅費・宿泊費 (実費) の不足部分に限り, 他の補助金との併用が認められる。)
- ② 審査結果は, 7月中旬に通知し, 学会 HP で公表する。
- ③ 発表終了後に報告書 (邦語 1200 字程度あるいは英語 500 語程度とする) および領収書の原本 (旅費・宿泊費) を提出すること。

4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円, アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会 (international@jaas.gr.jp)

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2019年度のOAH/JAAS Short Residency Programによる派遣研究者が次の2名に決まりました。このプログラムはアメリカ史を中心に, 日本の大学院生, 学部学生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので, 研究者は各大学に約2週間滞在します。研究者の専門領域, 受け入れ校と担当者, 滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催するご希望のある方は, できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し, この機会を有効にご利用ください。

Renee Romano (Oberlin College)

専門領域: 人種と法, 公民権運動, 大衆文化
受け入れ校/担当者: 東北大学/竹林修一会員
滞在期間: 2019年6月1日~6月14日まで

Elliott Young (Lewis and Clark College)

専門領域: 移民史, 中国系移民研究
受け入れ校/担当者: 成城大学/佃陽子会員
滞在期間: 2019年5月27日~6月10日まで

国際委員会

日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について / 2019年OAH大会

2019年4月にフィラデルフィアで開催予定のOAH年次大会に参加する, 米国留学中の旅費・滞在費受給者は, 以下の3名に決まりました。おめでとうございます。

児玉真希 (Rice University)
西岡みなみ (University of Tennessee, Knoxville)
山田優理 (University of California, Los Angeles)

国際委員会

『アメリカ研究』第54号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第54号の特集テーマ「メディアと情報（仮）」の趣旨は以下の通りです。

トランプ政権の誕生以来、「フェイクニュース」、「ポストトゥルース」、「オルタナティブ・ファクト」などといった言葉が日本でもすっかりおなじみになりました。当の大統領が記者会見で大手マスメディアの記者を面罵する光景もまたしかりです。誰もが自由に情報を発信できる現代の状況とあいまって、アメリカではマスメディアに対する不信感は上記の言葉やふるまいによって再生産され、それが現代のポピュリズムの興隆に一役買っていることはいうまでもありません。

ただし、権力がメディアを嫌うのは今に始まったことではなく、ペンタゴン・ペーパーズ問題やウォーターゲート事件からも明らかなように、メディアが第四の権力として権力の専横を批判し、腐敗を暴くからです。しかしながら、他方ではメディアが権力に迎合して数々のフレームアップのお先棒を担いできたことや、イエロージャーナリズムのように大衆を扇動してきたこともまた事実です。よく言われるように、「人は自分が得たいと思う情報だけを読む」ということが本当なのであれば、メディアが流す情報は時と場所を越えたアメリカの世論の映し鏡といってもいいでしょう。

そこで今回の特集では、アメリカのメディアから発信された情報が、国内、および国外において人々の意識や行動にいかなる影響を与えてきたのかということを考えてみたいと思います。ここでいうメディアとは、たとえば19世紀以前であれば新聞、政治パンフレット、あるいは講演録のような印刷媒体であり、20世紀以降であれば、これにラジオ、テレビ、映画のような視聴覚媒体が加わるでしょう。さらに現代であればSNSもこの範疇に入ります。これらの多様なメディアは、いかなる意図のもとに、いかなる情報を、いかなる層に向け発信したのでしょうか。そして、その情報はいかなる人々にいかに受け止められ、いかなる現象を引き起こしたのでしょうか。こうした問いは、結局は合衆国憲法で高らかに謳われた表現・出版・報道の自由の功罪を問うことになるでしょう。

本号では、ジャンルを問わず、こうした視点から、アメリカ合衆国がかかわる「メディアと情報」に焦点をあてた論考の応募を期待しています。

- * 1 「特集」に応募希望の会員は、2019年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メール（nenpo@jaas.gr.jp）で、年報編集委員会宛てにお申し込み下さい。その際のタイトルは『『アメリカ研究』特集応募』と明記してください。執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html 原稿締め切りは2019年8月31日（土）
- * 2 なお、次号より編集および論文審査における日程の都合上、原稿締め切りをこれまでより1カ月弱早めに設定しています。投稿をお考えの方、ご注意ください。

年報編集委員会



『アメリカ研究』第54号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2020年3月に第54号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内 容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚 数 論文は33×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。
執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal_guide.html
3. 原稿締め切り 2019年8月31日（土）
4. 提 出 電子メールで年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお送りください。
 - * 1 投稿希望者は、論文題目を2019年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込みください。
 - * 2 なお、次号より編集および論文審査における日程の都合上、原稿締め切りをこれまでより1カ月弱早めに設定しています。投稿をお考えの方、ご注意ください。

年報編集委員会

学会事務委託先の変更について

かねて本学会のウェブサイト等でご案内の通り、2019年4月1日より、3月をもって解散した(有)学協会サポートセンターに代わり、(有)あゆみコーポレーションが会員の入退会手続きや機関誌の発送といった事務局業務を開始しております。事務委託の引き継ぎが円滑に進むようご尽力いただいた、新旧の事務委託先および本学会の役員の皆様にご御礼申し上げますとともに、学協会サポートセンターには、2013年から5年以上にわたり事務局としての業務を丁寧に行ってくださったことに、本学会を代表して感謝の意を表明したいと存じます。

新しい事務委託先とその連絡先は、以下のようになっております。今回の変更に伴って、会員の皆様にはご面倒をおかけすることもあるかと存じますが、事情をご理解の上ご寛恕いただけますようお願い申し上げます。

アメリカ学会会長 高橋 裕子

新委託先

有限会社 あゆみコーポレーション

会社概要については、右記の URL をご参照ください。 <https://a-youme.jp/>

事務局連絡先

メールアドレス：office@jaas.gr.jp（変更ありません）

住所：〒550-0001 大阪府大阪市西区土佐堀1丁目4-8 日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内 アメリカ学会

電話：06-6441-5260 ファクス：06-6441-2055

新入会員（2019年3月13日現在）

佐藤正幸	早稲田大学	政 外 日
李環誠	慶應義塾大学（院）	政
Sokolsky, Anne	オハイオ・ウェズリアン大学	日 ジ 文
Barclay, William	カールトン大学（院）	政 思 政治理論
海老原由貴	神戸学院大学（講）	民 教 化
長野悠	明治大学（院）	地 社 民
Sato, Gayle K.（再入会）	明治大学	史 思 文

（*入会申し込み順、専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による）

編集後記

春になると、かつて勤務先の日米交流プログラムで滞在したご家庭からいただいた額入りの絵を眺めるのが習慣となっている。絵といっても桜植樹100周年記念切手に描かれたタイダルベイソンの桜。裏には小倉百人一首33番歌の英訳。かるた部に所属していた幼い頃、枕詞「ひさかたの」は下の句「しづ心なく花の散るらむ」に誰よりも早く到達するための意味をもたない記号だった。千年以上の歳月を隔てて“keep falling in haste—why is that so?”と英訳された紀友則の散りゆく桜が、今ゆっくりと心に響いてくる。

（渡邊真理子）

2019年4月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 高橋 裕子

編集人 中野 勝郎

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5